

学校に行くことに対する義務感の研究

—中学生を対象にして—

発表者：田原 凜子

指導教員：中間 玲子

【問題と目的】

不登校の生徒の数は年々増加の一途を辿っている。文部科学省(2022)の調査によると、2021年度の中学校における不登校の生徒数は約16万人、そのうち60%の生徒は年間90日以上欠席とされている。また、日本財団(2018)の調査によると不登校および不登校傾向の生徒数は約33万人であるとし、中学生の約7人に1人の割合であると憂慮すべき状況である。その要因は様々に考えられ、起立性調節障害などの病気との併発や学業をはじめとした学校ストレスなどが挙げられる。その中で新井(2001)は学校ストレスを調節する不合理な信念の存在を指摘し、岡村・清水(2011)は不合理な信念がストレスに対するストレス反応に悪影響を与えるとした。

本研究では、不登校に関連する不合理な信念として「学校に行かなければならないという気持ち(義務感)」について考えることとする。これらのことを踏まえて、本研究の目的を、中学生が抱えるストレスがストレス反応や不登校傾向に与える相関に学校に行かなければならないという気持ち(義務感)がどう影響を与えるかを検討することとする。

【論文の構成】

はじめに

第1章 問題と目的 第1節 問題の背景／第2章 学校に行かなければならないという気持ち(義務感)について／第3章 本研究の目的について

第2章 方法 第1節 手続き／第2節 質問紙の構成／第3節 有効回答の抽出

第3章 結果 第1節 項目分析／第2節 尺度の検討／第3節 ストレス経験とストレス反応及び不登校傾向との関連／第4節 義務感を考慮したストレス経験とストレス反応及び不登校傾向との関連

第4章 考察 第1節 項目分析の結果について／第2節 尺度の検討／第3節 ストレス経験とストレス反応及び不登校傾向との関連／第4節 義務感を考慮したストレス経験とストレス反応及び不登校傾向との関連

おわりに

引用文献、付録(調査に用いた質問紙)

【方法】

地方都市の中学校1校(219名)を対象に質問紙調査を行った。質問紙はフェイスシート(学年、性別)に続けて、①学校に行く理由の項目(「みんなが行くから」などからなる19項目)②義務感に関する項目(「学校に行かなければならない場所である」などからなる13項目)③ストレス経験に関する項目(菊島(1999)と森ら(2014)からなる計37項目)④ストレス経験に関する項目(櫻井・松井(2015)の16項目)⑤不登校傾向に関する項目(菊島(1999)の3

項目)⑥ソーシャルサポートに関する項目(村山ら(2016)のうち情緒的サポート 4 項目)⑦レジリエンスに関する項目(石毛・無藤(2005)のうち楽観性 4 項目)からなる。なお、⑥と⑦は質問紙の内容が否定的なものに偏っていることへの配慮であり、本研究の分析には用いていない。

【結果とまとめ】

データクリーニングの結果、1名の回答を無効とし、計192名の回答を有効回答とした。項目分析の結果、学校に行く理由項目の「友達と話したい、遊びたいから」で最も高い得点が得られた。このことから、中学生にとって学校に行く理由の最も大きなものは「友達」であることが分かった。また、不登校傾向の結果では「学校が嫌だと思ったことがある」に「よくあった」と回答した生徒が25.5%、「ときどきあった」と回答した生徒が「34.4%」であった。「学校が嫌で遅刻や早退をした」と「学校に行くのが嫌で休んだことがある」においても「よくあった」「ときどきあった」と答えた生徒は10%を超えた。

オリジナルの項目である「学校に行く理由」と複数の先行研究を用いた「ストレス経験」、短縮版を用いた「ストレス反応」において因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。「学校に行く理由」については「楽しさ志向」「将来性志向」「外的動機」の3因子、「ストレス経験」については「親ストレス」「友人ストレス」「ストレス気分」「多忙ストレス」「社会生活ストレス」の5因子、「ストレス反応」については「不安・無気力」「身体的反応」「不機嫌・怒り」の3因子が抽出された。

義務感項目と学校に行く理由の下位尺度を用いて義務感タイプの設定を行った。クラスター分析の結果、楽しさ志向や将来性志向が高い「学校満喫群」、それらに加えて外的動機も高い「学校適応群」、全ての項目が低い「無気力群」、義務感と外的動機のみ高い「登校義務遂行群」の4群が得られた。

各群における不登校傾向得点は、全ての項目で「学校満喫群」と「学校適応群」よりも「登校義務遂行群」が有意に高いという群間差が認められた。義務感タイプごとの「ストレス経験」と「ストレス反応」「不登校傾向」の相関に関して、も各群で差が見られたが、特記すべきとしては「登校義務遂行群」において「友人ストレス」がストレス反応や不登校傾向に特に強く影響を及ぼしており、学校に行く理由が外発的な生徒は友人に関するストレスが引き金になり不登校やその傾向につながることを示唆された。

まとめとして、学校に行かなければならないという義務感が不登校やその傾向に影響を与えることも示されたが、中学生において「友人」が大きなウエイトを占めていることが分かった。

【主要参考文献】

- ・菊島勝也 (1999) スレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響性格心理学研究, 7(2), 66-76.
- ・日本財団 (2018) 不登校傾向にある子どもの実態調査

https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/new_inf_201811212_01.pdf